

---

# 勇者さんの珍道中

黒星天魔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

勇者さんの珍道中

### 【Nコード】

N9238X

### 【作者名】

黒星天魔

### 【あらすじ】

魔王討伐の使命を背に、勇者が今、動き出す！ ついでに、他の何か変なアレみたいなの連中も。

1 ページ目「勇者さん、旅立つ」(前書き)

題名・勇者さんの珍道中

著者・私

## 1ページ目「勇者さん、旅立つ」

ある日、それはとてもいい天気の日のごとで、魔王が現れたと言います。

「いきなりすぎて意味がわからないよ!? それにもっとちゃんと天気選べよ、魔王!」

「勇者さん、偏見で物を言うのはよくありませんよ。魔王だって、悪い天気よりはいい天気に現れたいでしょうし」

「いや、だって、ほら……イメージが……」

「イメージ? 勇者さんは人を外見ではなくイメージで判断するんですか? 最低ですね」

「そういう君は人を外見で判断するタイプなのか!? というか、魔王、人じゃないし……」

「あ、そうそう。ツツコミはいいですけど、勇者さん、その調子でツツコミばかりしてたら、ツツコミだけが取り柄みたいな、そういうキャラ付けにされてしまいますよ」

「誰に!?!」

「もつとも、ツツコミをしない勇者さんに用はないんですが」

「一体何が目的なんだよ!?!」

「世界征服」

「君、魔王だったの!?!」

「冗談です。正しくは、世界制覇」

「どう違うんだ!?!」

「世界征服は、世界の全てを自分の物にすることで、世界制覇は、世界の全てに勝つことです」

「どっちも壮大すぎるよ!」

「世界をどうとでもできる力がほしい」

「神になりたいと!?!」

「ま、その役は勇者さんに任せますよ」

「任せられても困るよ!」

「殺伐とした世の中にするもよし、犯罪が少しでも減った世の中にするもよしです」

「犯罪は全部なくそうよ!」

「そんな絵空事、現実を見てから言ってください」

「君もね!」

「はあ、疲れた」

「いやいや! いちいちツッコミ入れてるボクの方が疲れるよ!」

「いちいちツッコミ入れるからじゃないですか」

「君がいちいちボケるからだよ!」

「またそうやってすぐ人のせいにする。昔からの悪い癖ですよ」

「さも昔からの知り合いみたいな言い方してるけど、ボクと君が出会ったのは今日だからね!」

「アレですか。勇者さんは幼馴染としか仲良くしないクス野郎ですか」

「何でそうなんの!」

「そんなに昔の女がいいんですか。私の何が不満なんですか」

「やめて! 付き合ってるみたいない方やめて! さすがに誤解されるわけないとは思っけど万が一にも誤解されたら嫌だからやめて!」

「え……そんな力一杯、否定しなくても……」

「……え、あ、う……ごめん」

「何マジになってるんですか? 何マジに期待してるんですか?」

「……」

「さては、勇者さん」

「……な、何だよ?」

「勇者さんって、割とチヨロイですね」

「チヨロイとか言うな!」

「ちよっと触られただけでも勘違いしちゃうようなタイプですよね」

「ちよっとの度合いがよくわからないんだけど……仮にドキッとは

しても、勘違いまではしないよ!」

「ちよつとの度合いは……例えば、肩と肩がぶつかったときとか」

「普通に謝るよ!」

「本当ですか? 相手が物凄く可愛い子でも?」

「……いや、そりゃ、ドキッとはするかもしれないけど……」

「可愛い子じゃなきゃダメって、勇者さん、何贅沢言ってるんですか?」

「今そういう話じゃないだろ!??」

「そもそも、勇者さんって、あまりモテそうには見えませんしね」

「どういう意味だよ!??」

「そのままの意味です。女ウケしないタイプというか」

「女ウケ!? ウケないとモテないの!??」

「でも、別にいいじゃないですか。男ウケするタイプ何ですし」

「ウケたくねえ!」

「これから先、きっとそういう展開があると思いますが、私の前ではイチャイチャしないでくださいね。気持ち悪いので」

「そういう展開は絶対にならないので安心してください!」

そんなこんなで、勇者さんと私の旅が始まったのであった。

「結局それ、全然意味伝わってないから!」

素晴らしいオチをありがとうございます。

1 ページ目「勇者さん、旅立つ」（後書き）

感想：妙なもん書くな！

何勝手に読んでるんですか

2ページ目「7人の勇者」(前書き)

題名：冒険の書

著者：アルク



## 2ページ目「7人の勇者」

遙か昔、魔界より現れし魔王がこの世界を我が物にしようとした。野に魔物を放ち、手下の魔族に人の住む土地を襲わせ、人々を恐怖と絶望で支配していたという。そんなある日、魔王を倒すべく、一人の若者が立ち上がった。魔王を倒すための壮大な旅は、それはそれは苦難の道程であつたらう。しかし、若者は決して諦めなかつた。人々を助け、また、人々に助けられながら、長い長い旅の中でどんどん成長し、その勇気ある行動は、やがて魔王を倒すに至つたのである。こうして、世界を救つたという素晴らしい伝説を残した若者は、勇者として、歴史にその名を刻んだ。というのは、今から千年も前の話だ。嘘か本当かも、現代を生きる一般人のボクでは知ることさえできない。

その日、ボクは珍しく自分一人で朝起きた。いつもは母さんに起こされてる。いや、起こされても寝ようと頑張ってるボクだが、そこはしょうがない。だって眠いんだもん。

夢を見たような気がする。千年前の、伝説の勇者と魔王の物語。残念ながら、内容はもう忘れちゃったし、覚えてたとしてもそれはボクの夢であつて、真実とは遠くかけ離れてる内容だつたらう。

まだ暗い室内で、カーテンを開けた。いつもは母さんにそれをやられて眩しいのが嫌いな吸血鬼のように苦しんでいたが、今日は違う。眩しいけど、何だかとっても、いい気分だ。

「……………」  
いい気分、だつたのに。

窓の外には、城の兵士たちがズラリズラリと　　うわ何コレやばそう。

コンコン、と兵士の一人に窓をノックされ、ボクはしばらくポーンとして、やがてカーテンを閉じた。

ドンドン、と今度は強めに窓を叩かれる。何コレ……ボク、何か悪いことでもしたっけ？ 胸に手を当てて考えてみても、心当たりなんてなかった。昨日は朝から幼馴染のミュウの買い物に付き合わされて、昼ごはんをミュウの家でごちそうになって、夜遅くなるまで適当にブラブラしながらミュウと会話してたぐらいで……うん、やっぱり心当たりはないな。平和すぎて城の兵士さんのお世話になるようなフラグなんて立つわけがない。これは悪い夢だ。きつとそうに違いない。

ドン！ と、やたら強い一撃が窓を襲った。今は本気でやばい。ボクの部屋の窓の強度の意外性にもビックリだが、これ以上はやばい気がする。強行突破なんてされるぐらいなら、大人しく窓を開け放ってやるうじやないか。

だってボク、何も悪いことしてないし。

カーテン、オープン。

そして、窓、オープン。

「お前がアルクだな？ 城まで来てもらおうか」

まあ、そんなことがあって、城へと連行されたボクは、てっきり牢屋にでもぶち込まれるのかと思ったのだけれど……なぜだろう 今、王様の前にいる。

けど、ボク一人というわけではなかった。右に三人、左に三人。鎧やら兜をフル装備した方々が、ボクと同じように立っていた。顔は兜で隠れてて見えない。まるで同じ鎧がズラリと並べられたみたいで、何だか薄気味が悪かった。

「よくぞ集まってくれた、7人の勇者たちよ」

王様が唐突にそんなことを言い出した。

……勇者？ ……7人？

ボクと左右の鎧の人たち、合わせると ちょうど7人。偶然では済まされない。というか、王様の視線は明らかにボクらの方。周

りで整列している兵士たちの視線も、残念ながら、ボクらの方だった。

「話は既に聞き及んでいるとは思うが、魔王が復活したという噂が徐々に広がりつつある」

……聞き及んでません。

魔王？ あの伝説の勇者に倒されたという？

「そこで諸君ら、勇者の力を受け継いだとされる7人の勇者に命ずる！ 今こそ、その力を世のため人のために示すときじゃ！ 7人の力を合わせ、復活した魔王を倒してまいれ！ 見事魔王を倒した者には、わしの娘を嫁にやろう！ もちろん、王位も譲るつもりじゃ！ というか何でもやるからとにかく適当に頑張ってくれい！」  
適当に……。しかも、力を合わせ とか言ってるのに、それじゃあ、魔王を倒した者って誰になるんだよ……。

というか、何で、え……？ 勇者？ ボクが？ ボクと隣の方々が？ 何ゆえに？ 意味がわからないよ……。

……というか、ボク、まだパジャマだし……。

城から出るまで、ボクら7人の勇者（？）は兵士たちの敬礼と視線を浴びせられ続けた。

夢なら早く覚めてくれ……。

それにしても、鎧の人たちは何も喋らない。ひよっとしたら兜に防音効果があるのではと思わされるぐらい、何も話そうとはしなかった。不気味すぎる……。

城を出て、城下町へと続く橋を渡ったところで、ボクらは立ち止まった。

「どつも」

……明らかに待ち伏せていたような 全身をローブで隠した上に、カラフルな旗がたくさん刺さってるという怪しすぎる格好の人

が、そこにはいた。声は女性のものだったが、怪しいことに変わりはない。

「私は怪しい者ではありません」

「その格好で言っても説得力ないよ！」

いきなりの真正面すぎるポケを、思わずツッコんでしまった。

王様にさえツッコミを入れたくなったポケだが、それでも頑張つて我慢してきたのに、とうとうツッコミを入れてしまった。

負けた気がするのはなぜだろう。

「いえ、この格好は違ふんです」

怪しい女はたいして慌てる素振りもなく、極めて冷静に、しかし、どことなく楽しそうに言う。

「王宮道化師のバイトをしまして」

「バイト！？ 王宮の仕事がバイト感覚でできちゃうの！？」

あの王様ならアリかもしれないと一瞬思ってしまった。

「本職は、一応、戦士みたいなことをしてるんですが、この国は、なんとというか、平和すぎてロクに依頼がなくてですね ああ、依頼とか言ってもわかりにくいですよ。簡単に言えば、魔物退治とかそれ系のことです。そういうのがなくて、戦士系の職業の人は全然稼げないんですよ。そこで思いついたのが、王宮道化師として雇ってもらおうという」

「思いつくのが王宮道化師って無理ありすぎない!？」

「そうですね？ 城って、たくさんお金ありそうじゃないですか。

ていうか、城ってお金でできてるんでしょう?」

「城は石製だよ！」

お金を使って作られた という表現のことを指すんなら、完全に間違いではないけれど……。

「まあそんなわけで、この格好は王宮道化師をしていた頃の 名

残り、ですかね」

「名残りという言葉をそんなことに使わないでほしいな……」

「そういふ君も、人のこと言えないような格好ですけどね」

「いや、これは……」

朝起きてすぐ拉致されたのだから、パジャマ姿でもしょうがないじゃないか。

「趣味の悪いパジャマですね」

「そこ！？ え、趣味悪い！？ どの辺が！？」

「可愛らしいわけでもなければリアルでもないただ怖いだけの熊の辺りが」

「熊じゃないよ！ 犬だよ！」

「え……」

「素でわからなかったのか……」

……まあ、確かに、熊に見えなくもない。最初見たときは、ボクもこのデザインに驚かされたが、慣れてしまえば芸術的でさえ思えてくる。熊カツコイイ。あ、違うや。犬カツコイイ。

とかなんとか、元王宮道化師の女戦士と話してる間に、鎧着た6人の勇者がいつの間にか5人に減っていた。

それに気づいたとき、もう一人が先に行ってしまった、残り4人。そりゃ呆れもするよ……。

「そうそう。私がどうしてこんな所にいたのかと言うと、実は7人の勇者さんにお話しがあつて待ち伏せていたんですよ」

「もう5人しかいないよ！ 何でもっと早くそれ言わないの！？」

「この程度のギャグについていけないようなクズ勇者に用はありません」

「ギャグ！？ クズ勇者！？」

敬語を使ってるからと言って、それが汚い言葉だと意味がない。

というか、破壊力が増しているような気がする……。

あ、また一人去った。

「大体、勇者ともあるうものが、7人掛かりで魔王を相手にすると

「というのが気に入りません。あなた方に誇りというものはないんですか？ 恥を知りなさい」

「……うん」

「一見、正論のような気もするが、この人にだけは恥を知れとは言われたくなかった。」

「今の発言で二人が去り、残るはボクと鎧の人が一人だけ。その鎧の人も、去って行く人たちを見てあたふたと落ち着かない様子だ。たぶん、自分も行きたいのだろうが、なかなかここを去る勇気が出ないのだろう。」

「言い過ぎましたかね。クズ勇者と言っても、鉄クズと一緒にではないので安心してください」

「それ謝る気ないよね!？」

最後の一人が、申し訳なさそうにこちらを見て、手を合わせて頭を下げる動作までして、走るようにしてこの場を去っていく。

さて、とうとうボク一人になってしまった。

何でボク、最後まで残ってるんだろう。

「では、勇者さん。あなたの旅に、私も同行させていただきます」

「誇りはどうしたの!？ 恥は知らなくていいの!？」

「何言ってるんですか、勇者さん。恥も誇りも、命には代えられません。相手は魔王ですよ?」

「ボク一人残ったところでそんなこと言われても説得力なさすぎだから! ……というか、ボク、やっぱり旅に出なくちゃいけないのかな……」

未だに自分が勇者だという自覚がない。

「というか、王様の勘違いという可能性もあるし……」。

女戦士は、表情こそローブの頭巾に隠れて見えないが、たぶん、微笑を浮かべながら、こう言った。

「それは、あなたの決めることです」

意外な言葉に、少し驚いた。

何だ、まともなことも言えるんだな、この人。

ボクがもし本当に勇者だったら……魔王が復活したというなら……世のため人のため、旅に出た方が正しいのかもしれない。だからと言って、一般人として過ごしてきたボクが、いきなり勇者だと言われたぐらいで、旅に出なきゃいけないなんてことはないかもしれない。

どちらが正しいのか、どちらが間違いなのか、すぐには判断できないけれど　それでもボクは、決断すべきなのかもしれない。

勇者として　というよりは、人として、迫られた選択は、いつか、いずれ、きつと、選ばなきゃいけない　そんな気がした。

「……と、とりあえず、今日のところは家に帰ろうかな……。母さんとも、ちゃんと話したいし」

「わかりました」

「……ん？」

なぜか、腕を掴まれた。

「そんなに今すぐ旅に出たいのですか」

「え？」

「さすがは勇者さん。家族との別れも必要としないとは、勇者としてこれほどカツコイイ決断はありません。あなたにはちゃんと誇りがあるような気がしてきましたよ」

「え、ええーっ!？」

「さあ、行きましょう。確かに、あんなクズ勇者共に先を越されるわけにはいきませんからね　勇者さんの言葉の裏には野心すら感じますが、そんなあなたを私は尊敬の念すら抱かざるを得ません」

「ちょ、ちょま　」

「私なら大丈夫です。しばらくは王宮道化師の格好のままの旅も良いでしょう」

「ボクが嫌なんですけどー!？」

そんなボクの訴えにも耳を貸さない女戦士は、親に別れすら言え

ない上にパジャマを着たままのボクという勇者（？）を強引に冒険の旅へと引っ張り出したのであった。

「言い忘れました。私の名は、ハーシエリーと言います。気軽に女戦士とでもお呼びください」

「せ、せめて武器だけでも買わせてー!!」

残念ながら、ボクの必死の叫びは、何もかも、彼女の耳には届かなかった。



## 2ページ目「7人の勇者」(後書き)

感想：未だに意味がわからない……。  
自分で感想書いてどうするんですか。

自分が文章書いたのに

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9238x/>

---

勇者さんの珍道中

2011年10月29日01時06分発行